



Title	アンドレ・シェニエ試論：その文学精神と生
Author(s)	泉, 敏夫
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 90-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/5996">https://hdl.handle.net/11094/5996</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アンドレ・シェニエ試論

—その文学精神と生—

泉 敏夫

アンドレ・シェニエ（1762-1794）は *Bucoliques, Elégies, Les Amours* の諸詩篇、それに獄中で制作された絶唱『囚われの女』を含む *Odes, Iambes* の珠玉の諸詩篇を残しているが、同時に詩の原理を掘り下げた哲学詩、及びフランス革命の坩堝の中で主にジャコバン派を批判した政治論文を陸續と発表している。かならずしも裕福でないシェニエ家の三男として生まれ、父の寛容と愛の中で、古代の清澄自由に憧れて詩人、文筆家の路を選んだアンドレ・シェニエが、弟、四男マリ＝ジョゼフ——皮肉な運命の巡り合わせといふべきか、彼が指弾する他派選出の国會議員となる——との思想上の確執の時期も含み、ついに1794年3月に逮捕され、4カ月後に処刑台に消えることになる。享年32歳であった。

この小論は、彼の人間と思想の形成過程を追いつつ、彼の哲学詩と政治論文の特色を探り、また彼の思想と言語表現（行動）との一致が隈なくなされている生様を考察することを目指している。

フランス革命2年目、1790年1月19日、ロンドンよりアンドレ・シェニエは父に書き送っている。

あなたはお読みになりましたか、そうでなければシュバリエ・ドゥ・パンジェが私に送ってくれた、密告と捜査委員会に取り組んだ秀れた書き物を読まれるよう勧めます。これは正義と崇高と理性、そして雄弁溢れる著作であり、気に入られないのはサン＝タントワーヌ地区のみでしょう<sup>1)</sup>。

この言葉について、ジャン＝マリ・ジェルボーは注目すべき指摘をしている。

この簡潔な文により、私たちの詩人は他の陣営に移った。この日（1790

1) André Chénier, *Œuvres Complètes*, Gallimard, 1958, p. 785.

年1月19日)より、彼はマレー地区の職人たちの前で震える人々と手を結ぶことになるであろう<sup>2)</sup>。

つまり「職人たち」とはのちにサン=キュロットの中心勢力となる革命集団であり、アンドレ・シェニエは「その前で震える人々」の列に加わることを意味する。ジェラール・ヴァルテールも同手紙に着目し次のように述べる。

この言及はアンドレ・シェニエの精神に生じつつあった深い転換を垣間見せるものである。このようにして、すでに「サン=タントワーヌ地区」は、彼にとって道理が通り、義なるものを理解し感じることが不可能な、また誠実で公正な言葉を評価することが不可能なものとなってしまった<sup>3)</sup>。

父に手紙を書くよう彼を駆り立てた精神は、果して彼の生涯の決定要因となるであろうか。

ナヴァール校以来の友、ドゥ・パンジュは1789年12月に『密告についての省察』を出している。密告という、不正義、恐怖による人権侵害の醜さを告発し、「何にも挫けない冷酷な人々、また何事にも安んじない猜疑心の人々」の下した「命令また復讐にあなた方は」従わされるであろうと説く<sup>4)</sup>。この『省察』はアンドレの心を動かし、父への手紙となつたわけである。

フォブール・サン=タントワーヌは、やがてパリにおけるサン=キュロット運動の有力な據点の一つとなるが、パリの諸地区ではもともと貧困者の数が高い比率を占めている2、3の地区のうちに入る。革命期間における同地区の動静の一齣をジャンヌ・ギャルジーは次のように浮き彫りにしている。1791年2月始めの事件である。

コンデ公の軍隊 [筆者注・反革命派] は徐々に脅威的となっていた [...] 人民はもう一つのバスチーユというべきヴァンセンヌの城を壊そうと試みた。ラファイエット [筆者注・フランス国民衛兵司令官、侯爵] はほどよく到着し、サンテール [筆者注・同地区のビール製造業者、コルドリエクラブ所属] 指揮下のサン=タントワーヌ地区から湧き起こる群衆を追い払い、阻んだ<sup>5)</sup>。

2) Jean-Marie Gerbault, *André Chénier*, Seghers, 1958, p. 86.

3) Gérard Walter, *André Chénier, son milieu et son temps*, Robert Lafont, 1947, pp. 133-134.

4) *Ibid.*, p. 133.

5) Jeanne Galzy, *Vie intime d'André Chénier*, Les Editions de la Nouvelle France, 1947, p. 123.

このように、革命の進展に於て近代の始まりに重要な寄与をすることになる地区が、何故、当初から自らにとって疎外された地区であるとシェニエに思われたのか、この問題の解明に私たちは固執しなければならない。またこれは知識人と近代との関係につながる一般的命題でもあろう。

アンドレの父、ルイ・シェニエは20歳の時、コンスタンチノープルに渡り、羅紗商人として働くが、その多才な手腕を認められ、数あるフランス商館経営者の中でも頭角を表す。しかし1765年中近東における通商不振のため、フランスに戻り、長い職探しののち、モロッコ駐在フランス総領事の地位を入手した。45歳の時である。彼は1767年現地へ単身赴任し、5人の子供のうち、長子コンスタンと三男アンドレをカルカッソンヌの親戚に預け、パリでは妻エリザベートが次男ルイ＝ソオヴゥールと四男マリ＝ジョゼフ及び娘エレーヌを育てる事になる。

パリではシェニエ夫人はマレー地区に住い、優雅な「美しきギリシャ女性《belle Grecque》」として振舞い、ギリシア風に装い、部屋には東方趣味の飾り付けをし、レセプションを催した。時にはギリシア語で歌い、ギリシア舞踊を披露したという。ギリシアや東方愛好の芸術家たちがこの異国趣味に惹かれて集まった。この美的・知的風土はアンドレに濃く影響を与えた。

*Elégies XIX* にアンドレは母エリザベートを歌っている。

わが母、オルフェの母なるトラキヤよ、  
わが眼が久しく望んでいたガラテヤよ、  
一人のギリシア女、彼女のみずみずしき春のころ、  
フランスの子たる夫の襟にて、  
美しくも、イスタンブールのただ中に、  
フランス人の私を生みしが故に<sup>6)</sup>。

アンドレは母を生粋のギリシア女性と信じ誇っていた。しかし、母なるエリザベート・ロマカ（旧姓）は、今世紀に入って出生が究められた結果、ラテン系でレヴァント人であるとされている<sup>7)</sup>。彼女の義母がギリシア女性であったことは事実である。

ジェロー・ヴェンザックは「アンドレの母こそ彼の想像力に飛躍を与えたのであり、ナヴァール校が彼の精神を育んだのである……電気から無神論ま

6) *Œuvres Complètes*, p. 72.

7) cf. Walter, op.sit., pp. 20-21 & *Œuvres poétiques de André Chénier*, avec une préface par André Bellesort, Garnier, 1924, pp. IV-V.

で<sup>8)</sup>と述べているが、彼のコレージュ時代を概観しよう。

当時父ルイ・シェニエは年19,000リーヴルの報酬を得ていたが、必ずしも富裕とはいえない状況で、パリではかなり派手な生活が営まれていたのである。1773年父は息子達の教育がなおざりにされていることを知り、然るべき教育機関に送ることに決め、アンドレをカルカッソンヌより呼び戻しパリの一流校 Collège de Navarre へ入学さす。アンドレは12歳であった。このコレージュには王国の著名な家門の子弟が入っていた。学友には財政長官の息子達であるトリュデーヌ兄弟（フランスでも有数の資産家）、フランソワ・ドゥ・パンジュ（のちに侯爵）が居たが、やがて四人は親友として堅く結ばれ、彼らの所有する広大豪奢な城館で度々快適な時を過ごすことになる。フランソワは「虚弱」であったが「学究志向と読書に対する情熱を有し」、また関心は「政治、社会学、宗教」<sup>9)</sup>に及んだという。

さて異郷しかも炎熱の地での勤務15年、齢60歳のルイ・シェニエはモロッコに見切りをつけて辞任、帰国する。1782年の9月である。彼は年金受給者となるが収入は約三分の一に減る。

アンドレの才能を見抜いていた父は、文芸の道あるいは法曹界か行政府に進ませたかったが、これ以上学業を続けさす資力はなく、アングレームの歩兵連隊の *cadet-gentilhomme*（見習士官）の身分を息子に見付けることに成功した。士官、*sous lieutenant* 少尉が空席であり、アンドレがその地位を獲得可能と考えたからである。1782年の秋アンドレは古都ストラスブールに赴任した。しかし「1783年3月17日、彼が渴望していた欠員少尉のポストは軍官学校出身の見習士官に与えられた」<sup>10)</sup>のである。父と子の宿願は見事破れた。つまりアンドレの身分では成就できなかった。昇進の夢も破れアンドレはパリに戻る。家計は益々苦境におちいり、住居も貴族的なマレー地区より他に移す。娘エレーヌは結婚し、コンスタンとルイ＝ソヴゥールは兵役に入るが、父はアンドレにパリでの安逸な生活を許すほど寛大であった。ドゥ・パンジュとトリュデーヌ兄弟との厚い交遊も続き、後者を通じて彼は当代一流の学者、画家等、例えばラヴォワジエ、パリソー、ダヴィッド等と交わっており、ヴェンザックによれば『ソクラテスの死』制作中のダヴィッドのアトリエを訪れているようである<sup>11)</sup>。同絵画については逸話がある。トリュデーヌ・ドゥ・マティーニ（兄）

8) Géraud Venzac, *La Jeunesse d'André Chénier*, Gallimard, 1957, p. 121.

9) Gérard Walter, *op. cit.*, p. 41.

10) *Œuvres Complètes*, p. XVI.

11) *Op. cit.*, p. 63.

は、mécèneとして学芸保護には惜しみなく援助した。L. ベック・ドゥ・フーキエールによれば、ソクラテスの絵画をダヴィッドに注文した時、トリュデーヌは6,000 フラン払い、それが大成功を収めた時、さらに2,000 フランを加えたという<sup>12)</sup>。アンドレに対しても交友に際して気前よく振る舞ったに違いない。事実、革命進行中のアンドレ執筆の政治論文印刷費用はトリュデーヌが支弁したであろうというのが定説である<sup>13)</sup>。

80年代も後半に入るとシェニエ家の会計は益々窮屈し、アンドレは1787年初めより職を探す。その結果ドゥ・パンジュを通じて駐英フランス大使ラ・リュゼルヌに紹介され、幸いにも大使私設秘書となり、3年間ロンドンに滞在するが、その間無為と屈辱を味わったという。例えば大使招待レセプションには彼は遠去けられ、客と同席できなかったのである<sup>14)</sup>。*Elégies XXIV* にその頃の心情がうかがえる。

おお厳しき束縛よ！ おお重くのしかかる隸属よ！  
 おお運命よ！ 私は見なければならぬのだ私の最上の年に、  
 望みと涙の織りなす私の日々が漂うのを、  
 寄せては返す希望と悲哀のうちに！<sup>15)</sup>

しかし、80年代は多作の時代でもある。とくに、古代に詩の原点をおき、科学と進歩を媒介として、古代と近代との関係性の中に、普遍的な新しい詩、新しい詩人のあり方を提示する力作が多い。392行からなる poème, *Invention*, 426行に及ぶ *Hermès*, 並行して400行を越える *Amérique* 等が創作されている。

アンドレ・シェニエの詩の世界で古代はいかなる座を占めているであろうか。1791年の *Elégies III* の一節を見たい。

節度ある訓えに自らを捧げながら、  
 古代の学理の聖なる乳に育てられ、  
 才能と、自由を生めるささやかながら確かなるこの宝をも同じく、  
 受け継いだ人は幸いなるかな！<sup>16)</sup>

古代は「節度ある訓え」であり自由を生んだ「宝」なのである。これらの古

12) L. Becq de Fouquières, *Documents nouveaux sur André Chénier et examen critique*, Paris, Charpentier, 1875, p. 99.

13) *Œuvres complètes*, p. XXII.

14) Jeanne Galzy, *op. cit.*, p. 88.

15) *Œuvres Complètes*, p. 75.

16) *Ibid.*, p. 58.

代の真髓が失われつつある時代を直視し、彼は復権を願う。*Invention*の一節を引いてみたい。

いざ、エウリピデスの語り口で、聖なる熱狂に昂ぶる人々が、  
人間たちと神々の暴君たる、愛を、  
歌うのを劇場へ見に行こう。  
そして、われわれを襲う夢心地に酔って、  
それをわれわれの間、われわれの歌の中に再び広めよう、  
彼らの生粋の古代花をわれわれの蜜に変えよう。  
われわれの思想を描くために、彼らの色を借りよう、  
彼らの歌の火にわれわれの松明を点そう、  
新しい思想の上に古代の歌をつくろう<sup>17)</sup>。

ジャック・ゴースロンが指摘するごとく、アンドレ・シェニエにとっては、近代の真の詩は、単なる古代の模倣ではなく、「個性的作品であるためには inventer しなければならない。従って模倣は発明と同義語となる」のである<sup>18)</sup>

*Hermès*においてはどうか。

われわれが巨大な都市のいずれにも、運命により等しく、  
人間たちは二つの掟につながれている。  
一方は、飽くなき奢侈をもて、暴虐な傲慢を、  
王侯貴族がぬけぬけとひけらかす。  
他方、これらの貴顕に媚びる卑しき常連達が、  
暴君を隠す城壁の下を這って行く<sup>19)</sup>。

このように Prologue で時代を批判し、古代より人類の歴史を通観し、ギリシアこそ非人間的城壁を壊す勇気を示した最初であると讃え<sup>20)</sup>、人間と共に生まれた「権利、理性そして正義」、さらに「調和」の復権を強く訴え<sup>21)</sup>。ついに詩人は「おおわが息子、わがヘルメス、わが最美の希望よ《O mon fils, mon Hermès, ma plus belle espérance,》」<sup>22)</sup>と歌い、ヘルメスとの合体に到る。

17) *Ibid.*, p. 127.

18) Jacques Gausseron, *André Chénier et le drame de la pensée moderne*, Les Editions du Scorpion, 1963, p. 97.

19) *Œuvres Complètes*, p. 391.

20) *Ibid.*, p. 393.

21) *Ibid.*, p. 399.

22) *Ibid.*, p. 404.

つぎに、長詩 *Amérique* の特色を示す一節を眺めてみたい。

清澄たる深淵、そこには鉄鎖から解き放たれた人間が、  
宇宙を創った会議に席を占め、  
その大始源に昇りゆく魂は  
それが聖なる本質の一部であると感じる<sup>23)</sup>。

以上のように、叙事詩の域を越え、知性の極限に、人間が宇宙の聖なる本質の一部に達し得るという雄大な哲学詩を展開している。

アンドレ・ベレソールは、シェニエの哲学詩に対してまことに厳しい批判をしている。「無力によるためか、あるいはディレッタンティズムによるためか、彼の精神は定まっていない。もしシェニエがフランス革命を通り抜けていたら、これらの着手された詩すべて、〔筆者注・*Amérique, Hermès*等〕はどうなっていたであろうか。彼はそれらをたんすの奥に片づけてしまったであろうと容易に推測できよう。フランス革命が彼を余りにも幻滅させたので、それらの作品が陳腐なまたは見せかけのものではないと思えなかつたのである。bucolique, idylle あるいは élégie amoureuse に属さないものは、ビュッフォン、ルソー、百科全書派の思想あるいは感情の焼き直しに過ぎない [...] ほとんど各行にジャン=ジャックとヴォルテールに出会う」<sup>24)</sup>と。確かにベレソールの直言のごとく、シェニエは18世紀思想の体現者である。しかし革命期間中、生を賭して「秩序」と「自由」を訴えたアンドレの、発条としてはたらいた諸作品の精神は、固有の力を有しているのではなかろうか。またシェニエが「無力」で「ディレッタンティズム」であったかどうかも課題として筆者に残る。とにかくベレソールの批判は示唆に富んでいる。

ここでアンドレ・シェニエの悲運と深く関わった弟マリ=ジョゼフの生に触れなければならない。彼はつとに戯曲での成功を夢み劇作を続けていたが、遂に当時の演劇界で高い評価を受けていたパリッソに認められ、時の Théâtre-Français のヴァノーヴに引き合わされ、劇作家としての地歩を固めて行く。政治世界に深く関わり、ダヴィッドやバレール（弁護士、後に公安委員会のメンバー）と行動を共にし、旧体制打破に向かって進む。後にジャコバン派の有力党員そして国民議会委員に選出される。劇については処女作 *Azémire* は失敗したが、1789年11月12日、Théâtre-Français にて初演の *Charles IX* は、名優タルマが主役を演じた故もあり、会場を埋め尽くした聴衆の熱狂

23) *Ibid.*, p. 428.

24) *Op. cit.*, p. XLI.

的な喝采を浴びたということである。ダントンはこの劇を支持し、「フィガロが領主を痛め付けたのならば、『シャルル九世』は王位を滅ぼすだろう」<sup>25)</sup>と述べる。かくして兄弟は異った道、しかも対立に陥ることが必至の道を選ぶことになる。

1790年5月にアンドレはパリに戻った。友人に勧められて、国民議会議員グループのラファイエット派を軸とし、自由主義貴族と上層ブルジョワ、法律家等保守層からなる「1789年協会」に入り、のちには稳健派フィヤンクラブにも加盟することになる。当時のアンドレの举措について、ヴァルテールはラクルテルの次の証言を引用している。「彼は会議において活潑に動いた。それは彼が日頃説いていた稳健では確かにないように思える」と。内気なアンドレをかく変貌させたものは何か。

アンドレは1790年8月28日、「協会」の *Le Journal* に1万3千語に亘んとする、『真の敵についてフランス人民への意見』を発表した。彼のいだいた政治改革についての見解は、党派、または煽動家によるのではなく、国民の代表団つまり国民議会に委ねられるべきだという点、そして彼の目指す共和主義は共和国と君主政体との和合を理想としていた。

上記論文において彼が強調しようとするところは次の通りである。《les ennemis publics》「公衆の敵」とは革命家が言うごとく、反動的亡命貴族たちではない。亡命貴族を許すべきだと思う。何故なら迫害は「新党員」をつくらず「殉教者」をのみつくるから<sup>26)</sup>。彼はさらに、文書独裁にすでに社会解体という不幸な要因が見られると言う。また「人民のため祖国のためと称して、仰々しい題目のもと、民衆の信頼を克ち取らんとする」<sup>27)</sup> 煽動家の無恥な精神を見抜くべきだと警告し、さらに彼の願いを、「もし、誠実ではあるが、向こう見ずで無秩序である人民に、われわれを取り巻く危険に目を見開くよう助けることができるとするならば、またもし、誠実で目覚めてはいるが、生ぬるく内気な市民に、偽りの自由、偽りの愛国心、芝居がかった作戦的な狂喜に対し、公共の秩序のために公然と立ち上がるなどを促すことができるとするならば、私の苦労もむなしかったとはとは思わないであろう」<sup>28)</sup>と吐露している。ゴースロンはアンドレの詩人としての使命觀をこの論文に読み取り次のように述べている。「詩に秩序を再建しようとした彼は、社会にそれを要求しないおれた

25) Gérard Walter, *op. cit.*, pp. 118-119.

26) *Œuvres Complètes*, p. 205.

27) *Ibid.*, p. 211.

28) *Ibid.*, pp. 224-225.

であろうか」<sup>29)</sup>と。

1792年2月26日、*Journal de Paris*誌上に、『フランス国を乱し自由の確立を妨げる無秩序の原因について』を発表する。これまでの政治論文の批判対象は共和派であったが、とくにこの論文はジャコバン派を名指し公然と鋭く批判、非難している。「これらの派は、すべて手を結びながら、フランスの回りに一種の電気の鎖《chaine électrique》をつくる。同じ瞬間に、〈大国〉《l'empire》の津津浦浦において、それらは諸共に動き、同じ叫び声を上げ、同じ運動を伝える。もちろん予め態々予言するまでもなかつたのである」<sup>30)</sup>と揶揄しながら党支配による愚かしい画一性を糾弾しているのである。また革命の大義という名によって、党派が幾多の「義にかない正しい人間」を恐怖に陥れ、沈黙を強いているかを訴える。

しかしながら、われわれはフランス国全体を見なければならぬ。前年8月には「ピリニッツ宣言」《Déclaration de Pillnitz》が発表され、オーストリー帝国及びプロシア王国は、亡命者に武器供与を約束し、フランス国の秩序回復、つまり王政復古のため共闘するよう他の君主国に呼び掛けており、諸外国のフランスに対する脅威は日毎に増していた。他方、買占めと投機による小麦他生活物資価格の急騰のため、フランス全土にわたって人民の生活は益々追いつめられている反面、大商人と自由主義貴族は巨利を貪っていた。当然農民、市民の不満が強まってくる。シェニエは果してこの深刻な内憂外患の情勢を如何に認識し、分析したか。疑問が残る。

1792年3月、シャトーヴィユー連隊のスイス傭兵軍のパリ帰還及び大赦を祝うため、勝利の祭典挙行が予告された。この祭典を催す理由は、兵士達が反乱を起し、王党派と見做される彼等の士官を殺したことを榮ある行為として、ジャコバン党が讃えようとしたところにある。アンドレ・シェニエは、兵士たちの無規律にに対し、また流された血に対して栄誉を与え得るのかと怒り、4月2日に『シャトヴィユー軍隊の兵士達に準備された勝利の祭典について』という論文を発表する。『聰明な愛国主義、眞の公共精神が市民達に彼らの尊厳につき正しい感情を与えたであろう都市において、このような祭典は、いたるところで沈黙と孤独しか、また見棄てられた通り、広場、閉じられた家々、人気もなき窓しか見出さないだろう。いたるところで見られる通り行く人々の侮蔑と遁走は、少なくとも、どれほどの善行の人々がこの破廉恥バッカスの祭り

29) *Op. cit.*, p. 128.

30) *Œuvres Complètes*, p. 275.

に参加したかを歴史に知らせることだろう」<sup>31)</sup>と述べ、作為された熱狂を聰明な市民ならば無視するであろうと痛言するのである。ジェルボーは「この事件の真相は明かではないが、この事件は高潔な愛国的怒りよりも給料支払遅延を原因としているように思われる」<sup>32)</sup>と指摘している。さらにわれわれは次の事実を知るのである。1790年8月31日、《Massacre de Nancy》「ナンシー殺戮事件」が起こっている。8月6日、ナンシー市で仏兵士とスイス傭兵とが共同し、上官の会計不正を摘発し、国民議会に給料不払不当を訴えようとするが、31日にはブイエ侯軍はナンシーの秩序樹立のため、凄惨な戦いを挑み、兵士たち及びナンシー市国民衛兵軍300名死傷の被害を与え、ブイエ侯は市のジャコバンクラブを解散させた上、シャトーヴィユーのスイス傭兵33名を処刑するという酷しい措置を講じたのである<sup>33)</sup>。従って1792年3月の事件とは明らかに連環していると考えられるが、シェニエはジャコバン派の祭典挙行の真因を究めた上で、祭典批判をなしたのであろうか。この企画を推進したのは、ベック・ド・フーキエールによると、マリ=ジョゼフ・シェニエであって<sup>34)</sup>、3月24日に祭典開催誓願書がマリ=ジョゼフ筆頭署名でパリ市長宛出されている<sup>35)</sup>。

1792年代に入るや、兄弟の思想対立は深まっていたが、この勝利の祭典問題を契機として、不幸にも兄弟の確執にまで発展したのである。

アンドレ・シェニエは同年2月より立て続けに論文を発表する。その数10篇である。しかし1792年8月10日、急進派民衆と連盟兵（マルセイユ義勇兵）はチュイルリー王宮を攻撃。チュイルリー王宮にはスイス傭兵軍と自由主義貴族軍人が集り国王を守っていたが、民衆側が激戦の末、王宮を占領、国王は国民議会に避難した。議会はその日王権停止を議決した（王政廃止議決は40日後、9月21日の国民公会においてなされる）。フィアン派はこの8月10日を境として勢力を失って行く。アンドレは逮捕の危険を痛感し、秋より逃亡、潜伏、沈黙の生活を続けざるを得なくなるのである。

さてシェニエをめぐってなお解説が俟たれる問題が多い。彼は「サン=タントワーヌ」に象徴される民衆に対し、全く背を向けていたか。1787年、*Hymne à la justice*において、「貴顕の足許に実りなき涙を流し／不毛の汗に

31) *Ibid.*, p. 294.

32) *Op. cit.*, p. 36.

33) 一連のナンシー事件については下記を参照した。

Jean Massin, *Almanach de la Révolution française, Des Etats généraux au Neuf - Thermidor*, Club français du livre 1963, 1988, pp. 79-80.

34) *Op. cit.*, p. 27.

35) *Ibid.*, pp. 27-28.

しとど濡れた／赤貧の農民」、また重税に「呻く街々」<sup>36)</sup>と歌い、貧窮、苛斂に喘ぐ庶民に目を注いでいることは看過せない。1791年の *Le Jeu de paume* においても同じことが言える。彼の内面における民衆観を探ることが必要であろう。

次に、彼の諸論文印刷費の出所に関わる問題もシェニエ理解に欠かせない。トリュデーヌと親密な時の外務大臣モンモラン（王妃アントワネットの強力な擁護者）との結びつきの線から、シェニエに援助がなされたという嫌疑、つまりその線（オーストリー委員会）を出所とする公安委員会の見方を、ヴァルテールは否定し、出所はトリュデーヌであったと言い切っているが、同時に、「アンドレ・シェニエの著作の中身が、オーストリー委員会の希望と意見に確かにまた完全に応えていたという事実は否定できない」<sup>37)</sup>と指摘している。われわれは、仮令そうであったとしても、その一致が動機と目的のそれであるのか、結果として偶々そうなのか、なお究める必要があろう。1792年10月28日、いよいよ身を隠して間もなく、ブロドゥレ（元国王顧門秘書官）への手紙で、「[...] 私は革命で何をしたか？ 幸い何も、絶対何もしていない」と応え、「公正なそして主義を曲げない人々の時代ではないと承知し」ながら、「私は意見を変えなかった」<sup>38)</sup>、この「率直さ」が「憎しみ」、「迫害」を買ったと述懐している。事実、この「率直さ」は、時の支配勢力への筆鋒鋭き直言を生んだのである。詩人として、古代に倣って自由な人間存在の確立のための抑え難き當為は、新しい社会を創る過程において無力でしかあり得なかったのか。

確かにシェニエにおいては、現実と自己との垂離の認識の不徹底さ、時代・社会状況の全体的把握の不十分さがうかがわれるにしても、彼は革命前後を通じ「主義を曲げない人々」に属していたことは否定できない。

(F. 1953 大阪学院大学教授)

36) Œuvres complètes, p. 163.

37) *Ibid.*, pp. XXII-XXIII.

38) *Ibid.*, p. 798.